

# 四門・仮門について

現在の前野地区では、葬儀の際に竹で門を作る風習が残っている地域がある。

・名前について

全国的には「四門」（シモン）、または「仮門」（カリモン）の名前が一般的であるようである。

・素材

竹製が多いようであるが、作り易さに起因しているようであり、決まりはないようである。

・使用方法

葬家からの出棺の際に、棺をくぐらせる。その後、墓地の入り口にも立て、こちらでも棺をくぐらせる。これが全国的にも一般的であるようである。二門くぐりという呼称もある。

・仏教的な用い方

四門の名の通り、四つの門を立てる。場所は葬家の庭、もしくは寺の庭、または墓地の隣接する広場等であるという。この門を、決まった順序で棺をくぐらせてから、墓地へ向かうのである。これは、仏教に説かれる悟りへ至る為の「発心」「修行」「菩提」「涅槃」という段階を、四門をくぐらせることで完了させる、つまり死者を仏と成らしむる為に行うのである。（四門くぐり）それが簡略化されたのが、今でも行われる墓地での三匝行道であるという。

・殯門（モガリモン）から仮門へ

しかしながら、仏教的な解釈が介入してくる以前から、門は存在していたという見解がある。その門とは「殯門」（モガリモン）であるといい、それが転訛して「カリモン」となったという説が有力である。殯とは、死者を本葬の前に、場を設けて一定の期間隔離し、それを司る職人が鎮魂する、日本古来からの葬送儀礼である。そして、死者が安置されている場へ入る門が殯門であり、平安時代の記録をみると二門あったという。そして時代が下るにつれ、門が四つになり、そこに四門という教えがある仏教が介入し、前述したような解釈が付加されるに至ったとも考えられている。

・現在の門の意味

四門の意味で、死者を成仏させる門として捉えても良いが、殯門と考えた場合、これをくぐって外にでるということは、鎮魂がすんだことを意味する。葬家の庭で三匝行道する例も多くみられるが、ぐるぐる回る行為は、日本古来の鎮魂の儀礼であるという。四門くぐりの簡略化より納得がいく気もする。そして、墓地の入り口の門は結界であり、悪いものを出さない、入れない為であろうと思う。